法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

伊吹舎学と草莽門人 ： 山崎篤利を中心に見たる

佐藤, 久夫 / SATO, Hisao

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
17
(開始ページ / Start Page)
89
(終了ページ / End Page)
99
(発行年 / Year)
1965-03-21
(URL)
https://doi.org/10.15002/00011789

Hosei University Repository

伊吹舎学と草莽門人

——山崎篤利を中心に見たる——

佐藤久夫

序

幕末に平田篤胤の国学が庶民間への滲透についての研究には、伊東多三郎氏(1)をはじめとして、既に勝れた研究が数多く出されている(2)。

また伊吹舎草莽門人であった山崎長右衛門篤利についても渡辺金造氏の研究(3)に尽くされたと評されているところである。本稿もこうした研究に負うての論であるが、山崎家の御好意で資料の閲覧を許されたので先学の研究に取残された資料等から、若干の補足と、私見を加え、明治以前の庶民教育の一端を考察して見たい。

一、平田国学の地方伝播

篤胤が国学者として一家を成し、真菅乃屋の家号で開業したのは文化元申子年のことであった。この年板倉周防守の家中の者三名が入門して以来、年毎に門人は増加し、文化十三年家号も伊吹舎と改名、ますます盛況となった。

(表①　年度別増加数　—東脩門人—)(4)

年	入門者数	年	入門者数	年	入門者数
文化元	3	文政元	11	天保2	19
2	2	2	26	3	15
3	4	3	14	4	11
4	2	4	16	5	12
5	4	5	11(17)	6	10
6	2	6	16(15)	7	9(10)
7	3	7	9	8	7
8	13	8	10	9	15
9	13	9	4	10	6
10	7	10	14	11	5
11	14	11	27	12	29(27)
12	12	12	16	13	14
13	87	天保元	20	14	28(27)
14	13				

この平田篤胤門人のうち、町人、農民門人いわゆる庶民門人の入門を見るに「門人姓名録」には

文化三年　南鍋町　浅里屋　野山又兵衛

Hosei University Repository

建具屋　浅見七兵衛

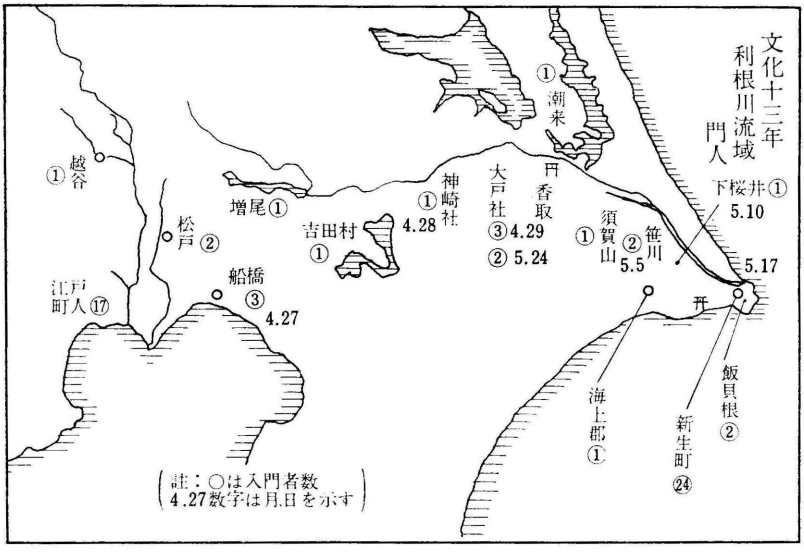
と見え、庶民門人の最初の入門者は篤胤の住居に近い江戸の職人が先駆をなした。

以来江戸町人の平田学入門は増加の一途を辿った。

（表②　江戸町人の年別入門者数―文化年間―）

年	町名	数	年	町名	数
文化3	南鍋	2	12	銀座	1
5	南鍋	3	13	日本橋	1
7	芝	1		南鍋	1
	新材木	1		本材木	1
	守山	1		本所	1
8	築地	1		京橋	4
	芝	1		牛込	1
9	麻布	1		下谷	1
	芝	2		霊巌島	1
11	鉄砲州	1		駒込	1
	日本橋	2		湯島	1
	新肴場	1	14	新肴場	1
12	南鍋	1			

表①、②で見られるとうり、文化十三年には、篤胤生存中にあっては最多数の門人を得ているが、これはこの頃篤胤が香取・鹿島・息栖社の参詣と門人拡張の為の利根川下流域旅行を行ったことによるものである。この折、香取、鹿島社では門人を得ることはできなかったが、表③に見られるとうりの多数の地方庶民門人いわゆる草莽門人を得たのである。この地方は比較的経済活動の発達している土地柄であったので、この草莽門人を得たことは平田学隆盛の要因をなしたと思われる。

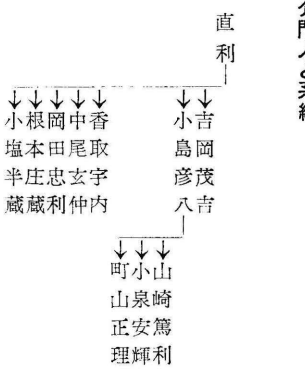


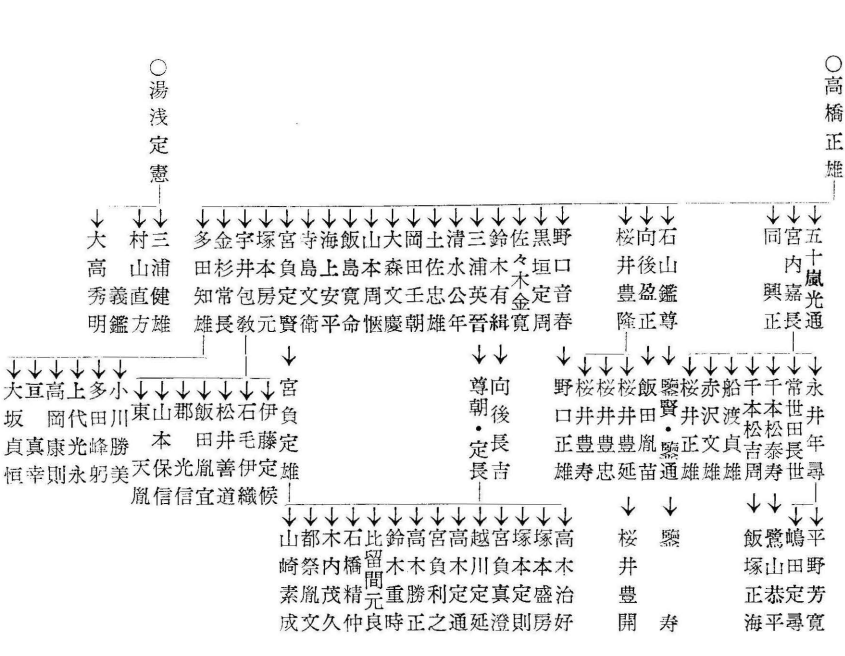
Hosei University Repository

またこの折の旅行で得た篤胤の自学への自信は、真菅乃屋なる家号を伊吹舍と改め、大壑なる通称は大角と改称して平田派国学の基礎的完成を見たのである。

この利根川下流域草莽門人が、その後どの様な伊吹舍発展の活動をなしたかを見るに、まずこの門人たちが親族、知人などを対象に平田学をすすめ、伊吹舍入門をすすめた紹介活動をあげることができる。この結果、利根川流域には著しい勢いで草莽門人が芋蔓式に拡大していった。左に草莽門人の紹介活動と系統を表にして見るに

表④　利根川流域紹介門人と系統





Hosei University Repository

○柴田義信―↓狩野保吉
　　↓斎藤勝文
　　↓弓削春彦―↓是雄↓出雲
　　　↓黒須真寿雄
　　　↓岡沢寛故
　　　↓田中保種
　　　↓白鳥義教
　　　↓高師信任
　　　↓石井豊則
　　　↓風袋元則
○中台円後↓岩崎吉彦
○森　義春↓平島伊助
（以下略）

表④のような利根川下流域の門人拡大の過程と、その系統関係が知られるのである。

二、篤利の入門

右表④で見られたとうり山崎長右衛門篤利も篤胤の文化十三年利根川下流域旅行が機縁となった、草莽門人紹介活動により伊吹舎に入門した一員であることが知られる。

入門過程を辿って見るに文化十三年、江戸京橋三十間堀の自宅を出発した篤胤が、四月二十七日先ず訪れた意富比社で、三名の門人を得ることができた。その一人に

下総国葛飾郡船橋　土屋清道紹介　四十八才
意富比神社大宮司　富上総介　直利(5)

がいる。船橋の富直利を得たことは篤胤にとっては極めて力強いものとなり、自信を深め、この旅行が成功した一因であった。直利の門人紹介活動は表④に記載したところであるがその紹介門人の一人に松戸宿の綿屋商人である

下総国葛飾郡松戸宿綿屋　富直利紹介
　小島彦八　元吉　後彦右衛門

なる門人がいる。元吉も伊吹舎門人として篤胤の経済的援助に、また伊吹舎発展に尽力した。その功に対して篤胤は「悟道辨」発行の際に、序文を記るすという形で元吉の名を記載して功に報いている。

小島彦八は越谷方面に門人を獲得したが、同文化十三年最初の紹介門人に同じ商人仲間である越谷の豪商

埼玉郡越谷新町　小島元吉紹介　五十一才
　山崎長右衛門　平篤利　因懇願与一字(6)

を平田篤胤に紹介し、伊吹舎門人に加えたのである。

三、草莽門人の経済援助と出版

(1)地方門人グループの活動

篤胤が地方門人獲得に力を注いだのは、平田国学の伝播はもとよりのことであるが、門人より経済援助を乞う為のものでもあった。入門と同時に納める束脩の他に、地方門人のグループへは、教科書である篤胤の著書を必要とすることから、出版費助成という形で、世話人を通して寄附金を集められるのが普通であった。

伊吹舎、越谷地方門人は山崎篤利の他に、小島元吉の紹介で文化十四年に入門した、小泉市右衛門安輝と町山善兵衛正理の二人が居り、三名で越谷地方門人グループを成している。この越谷地方門人にも当然助成金について

「―上欠―　然者平田大人著神代系図近々すり出しニ相成候ニ

Hosei University Repository

付、其御地御門人方江内談ニ則平田世話人伊助と申仁差遣し申候。尤先日市右衛門様善兵衛様江は、御咄し申置候間、右方々より御承知も有之哉候。右系図之儀仕立ニ相成、金六両ほと不足ニ而差支ニ相成候ニ付、御地御門人方江御無心差上申候。大かた貴君様へは、別段御出精相願可申哉ニも候。何卒無余日返金為致申候間、御聞済外之様子御談合可被下候。伊助市右衛門善兵衛より、御承知之上奉願候。先は右之段申上度、如此ニ御座候。(下略)(7)

なる要請がなされた。右の平田世話人より篤利宛の書簡に見られるとうり、出版助成の名目で三人で六両の調達が依頼され、また経済的に豊かな篤利には別段の援助を乞うた。というのは一人二両宛という均等割ではなく、グループ内で能力に応じて負担し、総額が割当額になればよかったことを示している。そしてこの調達には文中にも見られる様に門人中でも頭立った、平田世話人なる役員が当った。越谷門人の世話人は文化十三年の旅行の折に入門した、下総銚子の産で、江戸住いしている平島伊助が当っていた。

このように平田地方門人がグループで、出版援助、また篤胤の著書を入手する手段として、共同で資金を調達している例は少くないが、伊吹舎日記(8)より数例を抜き書きして見ると

文化九年八月廿五日　上総大高より金子五両入書状来る。
同　十一月十一日　銚子宮内主水使に末家明石八兵衛と云人来
書状幷金七両弐歩到来……(下略)
文政十二年十二月五日　(前略)三州吉田三人より玉襷彫刻料金五両、書状添到来、下総宇井出羽守より書状幷木内連願書到来(下略)

と、各地の地方門人も越谷門人と同様の組織がもたれていたことが知れる。

こうして平田国学―伊吹舎―は草莽門人の経済的、組織的な援助のもとに大きく発展していったのである。とはいえ門人の増加につれ、門人の経済状態も、学問への熱意も一様ではなく、何両といったまとまった出費の困難な者も少くなかった、こうした経済的に困難な者については

「〇今年も社中彫刻掛銀あり、竹内、上杉度々廻りに出る」(9)

といった出版費の掛銀制度による出資法もとられた。また篤胤晩年には更に組織されたものとなり

「進学会積金法
平田先生年来著述の書、数百巻に相嵩み候に付、彫刻方段々延引に及び候所、門人の衆中、右著述書物早々仕方候て、世に広くせむと被希候事頻りに付、今般、進学積金取結の儀申談候上、仕法規定左の通に御座候。
〇積金　一口分　一ヶ月銀一匁宛也
但し毎朝神拝の節、青銅四孔宛奉献候て、家内安全子孫繁昌、福寿増長の御礼奉申上申上候はば、一ヶ月積りて凡銀一匁余にも相成可申候、
〇江戸にて身元慥なる町家一人、集合預り方相頼置候て、最寄の世話人より右金預り方へ金子相届可申候事
〇京、大阪は勿論、諸国村方迄も、最寄々々へ世話人相定置候

Hosei University Repository

て、毎月掛金世話人方へ相渡し、世話人方にて員数都合の上、書状相添、江戸表金預り方へ相届可申候事、（下略）(9)」

と進学会にまで発展し、積金制度も細部まで規定された、ここに伊吹舎の経済的援助組織は全国的なものとなっていった。

こうした草莽門人の出版援助の組織は殁後門人にも引継がれ、出版活動にも注目されるものが多い、その一に

「門人岩崎長世。前島正弼。北原信質等いう。吾師ノ翁の著されたる書籍百部可り。其が中に三十余部は。既く上木なりて。世に弘まれれど。其本編たる此れの伝はしも、此ほどまで写本なりければ。容易くは乞賜難なり。然るに何の御書にも御さとし言の終めには、古史伝に就て見るべし。古史の何段の伝を見るべし。とやうに有るに切迫りて。野中の花を霞にまどはし。月まつ嶺に軽引雲の。いと飽かず口をしくて。誰しの人もやむめるが。身にもしられて慷慨さに。いかで其の巻々を。はしつ方より乞賜て、神に　皇に。忠誠しからむ人を前めて。板に彫らせて。世に弘くせばやと。おのがどち量定めて。やがて御許にねぎまをしを。憚し鴨。欣しかも。諾と宣はせて、その清書を。すきすきになむ賜せけるまにま。先此はじめの巻をば。今村の信敬して。かく桜の木にゑらせたるなり。信敬は。信濃国伊那郡麻績里人。」(10)

なる伊那谷の実行教会を中心とする「古史伝」出版の事業があげられる。

この事業は信濃地方門人の運動に留まらず、広く伊吹舎門人衆へ呼びかけ、出資義捐制度を採用して出版事業の拡大を図った。

この結果、甲斐・美濃・下野・三河・駿河・近江・石見・讃岐・備後・豊後と伊吹舎門人の全国的事業となって発展していったのである。(11)

(2)地方有力門人としての篤利

以上の気吹舎地方門人会の出版援助を主とする経済的援助を記したが、こうした集団としての援助と共に、門人一個人として篤胤を援助し、平田学成立に尽力した意義も、伊吹舎発展の上で見逃せない。

篤胤が鉄胤に宛た書簡の中で

「世の為、人の為にト千辛万苦、言語道断の苦みしツツ書ヲ作リテ、仁者のカゲニテ板ニホリ、云々」(12)

と記していることにも、経済的有力門人―仁者―の力がいかに大きかったかが伺える。

伊吹舎草莽門人にあって、こうした豪商門人と呼ばれる門人が文化八年十月北川真顔の紹介で入門した。即ち

駿河国府中江川町　銭屋　柴崎十兵衛直古

と、直古の紹介で翌月入門した。

駿河国府中江川町　三階屋

新庄仁右衛門　藤原道雄

をまずあげ得る。柴崎・新庄両者と篤胤の援助関係は渡辺金造氏「平田篤胤研究」書簡篇八三・八四・八七・八八等に記載されているところである。

文化八年以来篤胤の有力経済門人であった柴崎・新庄に引続いて、文化末年頃より、山崎篤利が台頭した。従来の気吹舎門人が

Hosei University Repository

五両・十両の出資といえば精一杯であったのとは異り。

「借用申金之事
一金弐百九拾六両也　文字小判也
　但利足之儀者壱割
右者此度御厚意を以て、古史成文三巻、古史徴四巻共、彫刻致し、且仕立迄之入用として借用申処実正也。返済之儀者、最初御約束申候通、右本売渡之金子ニ而、元利御勘定御引取可被下候。万一為金子返納に能はず候者、板木不残取揃、貴殿方江御引取り摺立、本書肆江御売渡被成、其利分にて元利相済次第、板木者此方江御渡可裁下候。尤此度摺立相済候上者、直に板木御預ヶ申候ても不苦候。此儀者御勝手次第に可被成候。為後日仍如件

　　証　人　平　嶋　伊　助　印
　　借用人　平　田　大　角　印

　文政元戊寅正月十日　より追々
　山崎長右衛門殿」(13)

なる大金を篤利は調達できる門人であった。さればこそ、篤胤が「学問にはやづらに御座候へ共、内実ハ子の心得にて居候へば親とたのむ貴老」(14)と一町人の篤利に頭を下げたのも、その本心は財布にあったからだ。

新庄道雄と篤利の平田門人としての位置の「振り変り」は文政二年古史徴出版に当って明確に現われた。

篤胤は門人のうち出版援助や平田学発展の為に尽力した者に、出版書の序文、或は跋に姓名を掲げて、その名を後世に残すという手段の褒賞制度をとっている。(東脩門人だけでも百人に達する)従ってその名の出され方で信任度も知れるのである。勿論文章は篤胤が書くのであるが表向きは門人の記載のように見せかけているのである。

古史徴解題記もその例に従って出版に功のあった新庄道雄、山崎篤利の名が載せられた。ところがこれ迄有力門人の第一であった新庄には「古史徴のそへこと」に記名されたにすぎず「古史徴序」及び「開題記目録大意」は山崎長右衛門篤利の名で掲げられた。それではと遠慮する篤利に

「(上欠)を入れて記し度存候へ共、余りさし出しなること故名乗り斗りと御申故、阿の如く致し候事に御座候へ共、ならば長右衛門という名を出すかたよろし御座候。何れよく御勘考なされ、此次早々のたよりに御申こし。
可被下候かし。
二十六日までに御さた無御度候へバ、相直し申候間左様御承知
可被下候」(15)

と長右衛門の名も無理に入れて

「御名を国中にかかやかさんという」(16)

熱心さであった。これというのも三百両もの大金の出資に対する返礼からであった。

篤利とてこの大金を容易く出資できたのではなく養子の身であることから、まわりに気がねしつつの調達であった、その為篤胤も折に触れては少しでも篤利や一家の者を安堵させるように

Hosei University Repository

「（上欠）阿まり阿まり御苦労ばかり御きかせ申候故、またうれしき事を御きかせ申候。本庄の津軽様より、こう志やく出てくれろと申込ミ有之候。これ迄タ吉事のわけ御座候。

○公儀御目付のはきき内藤周防守様より古学の趣意をかき出し候様ニとの事故、認メ出し候。是大吉事ニ御座候。其後いまだ御沙汰ハ無之候へども、阿りがたき事に御座候

○今年か来年の内に公方様へ御目見被仰付可申と、彼是より取持申上候由も承り伝へ候。是も出来可申と存候。

○水戸様、越中様、はなハ林大学様、其外きき道の所々にても当時平田ほどの学者ハないとて、開題記の評判誠によろしく御座候。弟子内でほめることハひいきにもあれど、右之所々にての評判は、誠ニ天下のよき評判ニ候故、これと存候すべてケ様ニ評判（以下欠）」(17)

とか

「（上欠）我等年頃を申候所、其くらいの年ニて、ケ様学問の出来候といふハ、只今ニハ有まじ。何れ公儀ニても、此学問ハ御取り用へなさるべく、是也に御すて置キなされがたきとの事、かへすかへす御ほめなされ、追而後さた有べくとの事ニ御座候、一統誠ニありがたがり大悦仕候。是も偏ニ御かげ故ニ御座候なほ吉さた次第可申上候。色々様子よき事ども段々御座候也（下略）」(18)

などの書簡を送る心遣いを常に行い、平田学は公儀にも、また禁中でも採用される有望な学問であることや、篤胤自ら己は天下一の学者であると宣伝することによって、借金の取立を防ぐ必要があった。

この後も篤胤が篤利から金子の援助を受けていることは、気吹舎日記に見られる篤胤の越谷訪問のひんぱんさでも知られるところであるが

「〇十六日に山一又々御出のよし、其節金子十両御もたせ御こし可被下候」(19)

「もし御都合相成候ハバ、一夜どまりにて御出府被下候様ニ致し度候。さしたる用事も無れども、板も出来そろひ、又々何かの御咄しも志ミ〳〵致し度候へバ也。さて三十日ごろまでのたよりに、七両ばかり御むし被下候」(20)

などの書簡で一層明らかにされよう。こうして現金による山崎家よりの調達は篤利の生存中は続けられていた。

山崎家より平田家への援助は、現金の他に生活上の物資や食品なども絶えず届けられていたし、また広い倉には衣類や版木なども預るなどの便宜を与えていた。篤胤よりの手紙にも

「（上欠）致させ候参りたのにハ、こまり入申候。山一とうふやへも、よろしく御願申候。おばア様こと、山一がくるの〳〵と日々御まち被成候間、其由も御申可被下候。

○夏もの二十品もたせ上候、御六ケ敷ながら御志まひおき被下冬ものミ那御こしに入可被下候。もしミ那もてず候ハバ、折瀬のハ阿とへまハしてもよろしと申事ニ御座候。

○かたぎぬ、はかまハせうぞくのいためがミへ、一志よにして御こし可被下と申事ニ御座候いたむから

○はみがき上候。是ハよろしき品故、先日のよりハ高き由ニ御座候

Hosei University Repository

○ひきわりを少々山一へ云て下されとおばア様被仰候。少しにてよろしく御座候。

○なつめ少々御とらせ可被下候。くれ〳〵も善ニ郎ハ明日此男と一志よに御こし可被下候（下略）」(21)

とか、例年定期的に贈り届けられているものとしては

「（文政九年）十二月十八日　越ヶ谷より稲来る」

―伊吹舎日記―

「―上略―例年之通リ稲穂御願申度奉存候。御地より御幸便御座候ハヽ、御事伝可被下、此方よりも、其内ニハ御願ニ差上可申、何レとも便次第奉希上候」(22)

などの資料に見られるように稲が山崎家より平田家へ送られていることも知られる。稲は祭詞用か、食用か明きらかでないが「稲穂」とあることから、後者は祭礼用と考えられる。前者は十二月であるから食用と見てよいと考える。

山崎家には今日も当時からの大きい倉が残されているが、江戸の平田家は借り屋住いで転々として住所をかえている。その為上記書簡にも見えるように、季節外の衣類など越谷へ預けておいたことが知られるが、板木もまた、山崎家には数多く所蔵されていた。この板木の所蔵については、上記借金証文の文面に金子返済不能の場合は、板木残らず取おさへても結構とあることから、渡辺金造氏は山崎家に保管された板木は借金の代償として取ったものと解している(23)。しかしそうばかりいえないことは衣類の例で考えても、また

「（上欠）一下りあと板木仕舞所、扨々こまり可被申候。今年は藤本弥内登り候間、頼み可遣、夫迄の所よろしく手配可被成、モシハ其元帰府迄進呈へ頼み上野御蔵へ頼み、上野御蔵へ頼むこと出来まいか」(24)

なる手紙を鉄胤へ送っていることからも板木の所蔵場所には苦労していた事情がわかる。こうした保管場所のないことから、山崎家へ板木が預けられていたと考える方が借金の代償に取ったと考えるより、伊吹舎日記の

「文政十年八月二十二日―上略―越ヶ谷より帰る。御伝記の板神拝式の板持帰ル」。

「文政十一年五月三日　市政を下谷へ遣ハシ金子受取。行徳がし八幡屋へ弓削氏への届物岡沢迄遣す。河村与三右衛門より金子持セ使来。反畝より御出、越谷より板木来、番町服部九十郎殿家来平山名助といふ人入門也。青木勇来、堀越記兵衛来」

これら板木の事情は納得出来るのではあるまいか。

註

（1）「草莽の国学」昭和二〇、羽田書店。「庶氏文化史より見たる下総の国学」日本歴史一一六号。等

（2）芳賀登「豪農平山家の学問」地方史研究三三号
小林英一「下総国香取郡における平田篤胤と大原幽学」地方史研究三八号、等

（3）「平田篤胤と山崎篤利と」国学院雑誌37の10・11
「平田篤胤研究」昭一七、六甲書房。
「平田篤胤と山崎篤利」昭一八、平田篤胤研究会、など

（4）門人数は「大鑒君御一代略記」―平田篤胤全集四・たま

Hosei University Repository

だすき附―（国学者伝記集成、附表も同じ）の数を記載した。（）の数は国会図書館所蔵「平田篤胤授業門人姓名録」＝誓詞帳（以下門人姓名録という）によって補正したものしたがって姓名の明らかな数である。

○文政五年には鉄胤の記載数の外に門人姓名録には尾州の河村作右衛門・上総の岡沢織部が追記されており、更に井上頼図が永井信濃守家中より四名入門したことを註記している。したがって計六名の増となる。

○文政六年太田作兵衛は抹消されているから一名の減となる。

○天保七年、十名の氏名が記され、鉄胤の記載より一名の増となる。

○天保十二・十四年は二名と一名がそれぞれ鉄胤の記載した数より門人帳では不足する。

よって鉄胤の記るした五百五十三名より三名の増、五百五十六名が門人帳の束脩門人となる。

○歿後門人数については

「御歿後、天保十五年甲辰より、慶応三年丁卯に至り、入門之者一千三百三十人（これを中等の門人と為す）」―平田篤胤全集四・四四五～六頁

○「―上略―、御一新後、去し戊辰の春の初めより、今年己巳の六月末まで、西京及び此地にて入門の人々合せて一千四百二十四人なり」―同、全集四・四四九頁

となり門人総計は三千三百人となる。

（5）「門人姓名録」一の十、

（6）同右、一の十八

（7）山崎家文書、平田家より山崎篤利宛書簡、年月不詳

（8）渡辺金造「平田篤胤研究」資料編参照

（9）同右、三四二頁以下

（10）「古史伝」一之巻―平田篤胤全集七

（11）同右、八之巻～三十一之巻、巻末参照

（12）渡辺金造「平田篤胤研究」書簡編五八

（13）山崎家所蔵、借用証文、（この他十五両の証文もう一通あり）

○篤胤が一時ではないにしろ、山崎家から二百九十六両の借金をしていることは「伊吹舎日記」の

「（文化十四年）十一月二十五日　今朝先生越ケ谷へ御出伊助御供、松戸へは陳平参る。

同、十二月三日　越ケ谷より御帰り、上首尾のよし

（十二月十日付　篤胤十五両借用）

（文化十五年）正月十日　越谷より金弐拾両受取御帰り

此以後度々御受取也　同、、十月十二日　伊助越谷より帰宅、弐百九十六両と取窮メ、十三両持参、受取、皆済也

と申事

右の記載により明確であるが（十カ月分割で）（13）の借用証文はそのまま信用することはできない。

まず日付である文政は文化十五年四月以降であるのに、文化年中に文政元年正月十日付である。これは当然後の証文

Hosei University Repository

を日付だけ合わせたものであることを示す。この事情を日記と照合して考えるに、また筆蹟が平島伊助のものと考えられることから、文政元年十月十二日の皆済日に伊助が借金の約束をした正月十日にさかのぼって入れた証文であると考える。この折年号をうっかりしたと推察するのである

(14) 山崎家所蔵、篤胤より篤利宛書簡
(15) 同右、文化十五年か正月二十一日付篤胤より篤利宛書簡
(16) 同右、年月不詳
(17) 同右、文政三年か月日不詳
(18) 同右、文政三年か三月二十八日付書簡
(19) 同右、年不詳、十月六日付書簡
(20) 同右、年月日不詳書簡
(21) 同右、文政四年か九月五日付書簡
(22) 同右、文政九年か十一月二十四日付平田鉄胤より山崎篤利宛書簡
(23) 渡辺金造「平田篤胤研究」—二三〇頁
(24) 同右、書簡篇

(付記) 本稿に於ては紙数の都合もあり、次の項目を割愛したことをお断りしておく。

四、草莽門人の学業
五、草莽門人の教育史上の意義
六、山崎家文書の研究

法政史学 第十六号

—目 次—

家人・奴婢に関する一考察……丸山忠綱…一
寄進状より見た葦名氏の禅宗信仰について……葉貫磨哉…三
藩法よりみたる岡山藩政について
—藩法発布の概観と農村政策を中心として—……大貫久雄…三四
舎密開宗の影響……向井晃…四九
明治初年横須賀造船所の学校制度……渡辺整治…五八
御雇外国人の研究—とくに数の考察—……中村赳…六五
田中外交の一局面
—張・山本協約について—……芳賀秀明…七六
在家の進化について
—とくに香取文書を中心として—……中村瑞恵…八五
美濃国不破郡赤坂宿における助郷役について……中村嵩…九三
発表要旨(大会・例会・大学院)……九八
会報・学内消息……一二三